

戦後日中教育文化交流史に関する教育学的研究
—大平学校の事例を中心に—

論文概要書

指導教官：小林（新保）敦子教授

孫 暁英

1. 課題設定

本研究の目的は、1972年日中両国間の国交回復から現在に至るまでの約40年間に亘る日中教育文化交流事業における日本語教育を、教育学の観点から検討することにある。とりわけ、日中国交回復後、中国の「改革開放」¹路線の中で、日中協力関係の形成に大きな役割を果たした「在中華人民共和国日本語研修センター」（通称「大平学校」、1980年設立）²を拠点に展開された日本語教育の実践が、日中両国間の教育文化交流に与えた影響とその意義を明らかにしていく。

近代における日中教育文化交流は19世紀末の清朝末期から開始され、中国における本格的な日本語教育の始まりは、1897年に京師同文館における東文館の増設である³。翌年、『東文学堂』といわれる様々な日本語学校が時代の需要に応じて続々と出現し、中国本土における日本語教育の最初のブーム⁴が現れた。天津、上海などの日本人租界における学校の中で始まった。その後、日中戦争に伴う日本の中国に対する軍事的侵攻を背景として、「満洲国」、あるいは華北、華南などの日本軍占領下では、植民地支配のために日本語教育を「国語教育」として強制的に普及してきたという歴史的経緯がある。しかしながら、日中戦争の終結後及び中華人民共和国建国後は、国交断絶の中で両国間の文化交流事業も途絶え、国交回復及び文化大革命⁵の終結を待たなければならなかった。

その後、文革後の「改革開放」路線の中で近代化政策が推進され、日中共同で様々な取り組みが繰り広げられたが、その代表的なプロジェクトとして大平学校の実践がある。大平学校は、文革直後の1979年12月に大平正芳首相（当時）の訪中をきっかけとして誕生し、ODA政府開発援助という形で、中国の大学の現職日本語教師120名に対して1年間の日本語教育に関する集中研修を行い、これを5ヵ年継続することにより計600名の教員の再教育を行うことになった。大平学校には、当時、上智大学教授の金田一春彦を始め、同

¹ 経済体制の改革及び、対外開放のこと。1978年12月に開かれた中国共産党第11期第3回全体会議（略称「三中全会」）で、中国は計画経済から社会主義市場経済へと移行し、対外的に開放政策をとることになった。

² 名前の由来について、日本語の正式名称は在中華人民共和国日本語研修センターであり、中国語の正式名称は大学日語教師培訓班である。当初中国で「培訓班」としていた。その後様々な「培訓班」が組織され、それらと区別するため、大平正芳首相が提起したプロジェクトに因んで、中国人関係者は大平首相の名前をとって「大平班」と呼称するようになる。日本語に翻訳すると「大平学校」である。以下本研究では単に大平学校と略称する。

³ 劉建雲『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』、学術出版会、2005年、79～80頁。

⁴ 劉建雲、同上書、2005年、80頁。

⁵ 1966年夏から、中国で文化大革命（社会主義文化大革命、のちに文化大革命）以下、「文革」と略す。矢吹晋『文化大革命』講談社、1989年、11頁。

じく早稲田大学教授木村宗男、東京外国語大学教授国松昭、国立国語研究所所長林大、日本語教育学会会長小川芳男、大阪大学名誉教授宮地裕、京都大学名誉教授渡辺実などの日本を代表する著名な国語国文学・日本語教育関係の学者（のべ91名）が相次いで赴任し講義を行った。

大平学校以前には、これほど大規模に日本語の教師研修を行った例はなく、それまでの中国における外国語教育の在り方の反省の上に、その教育方法は教育知識の一方的な伝達というやり方から、主体的な問題意識を持ち研究能力を備える教師を養成する方法へと移行した。当時の最新の日本語教育が大平学校を中心に展開されたのである。

その結果、中国の日本語教育は改革され、日本語教育のレベルを向上させた。大平学校の設立は、中国の日本語教育にとって重要な転換点となったといえよう。そして全国各地から選ばれた600名の日本語教師は、大平学校の1年間で視野を広げ、日本語能力を高め、所属の大学で大平学校モデルの教育を実践した。

さらに大平学校の修了生は、同窓会を通してネットワークを形成し、その後現在に至るまで30年間にわたり中国の日本語教育を支えてきた。

大平学校は日中両国が意図的・計画的に他文化との相互作用の機会を設け、相互理解を促進しようとするものであり、改革開放期における先駆的事例であり、「相互作用型」の異文化間教育モデルでもある。当時日中教育文化交流が希薄だった中であって、大平学校では、日本と中国という異なる文化的背景を持つ人々が共に学び、影響しあった。中国人研修生だけではなく日本人講師にとっても、大平学校は濃密な異文化体験のフィールドであった。こうして大平学校での教育実践は中国における日本語教育だけでなく、日中教育文化交流、日中関係の改善にも、その後大きく貢献するのである。

しかしながら、大平学校に関しては、従来まとまった研究がなされてこなかった。本研究においては、まず大平学校の実態について、第1次資料を発掘しながら、全貌を明らかにしていきたい。そして大平学校での人的な教育交流や異文化間の教育実践が日中関係にもたらした意味について、教育学的な観点から解明していきたいと思う。

さらに本研究は、人間の一生にとっての言語教育の意味を検証することも目的にしている。従来の言語教育は「ことばの機能と応用」といった側面に重点が置かれてきた。どのように言語を学習者に教えるのか、いかにすれば学習効率が上がるのかということが研究の主な関心事であった。そこでは、学ぶ側、つまり学習者のアイデンティティや人間形成などの内面的な部分、個々人の社会への還元については、必ずしも重要視されてこなかつ

た。

しかし近年、社会構成主義などの議論の中で、言語教育の研究は、「ことばの力」、つまり、言語を習得することによる人間力の形成、あるいは人間形成におけることば果たす役割へと踏み込んでいる。本研究においては言語学習がその時代の影響を受けながら、学習者の人生とどうつながり、言語を学ぶことが学習者の人生をいかに変えたのかも合わせて検証していきたい。その意味で、本研究は、個々人の「言語人生」⁶を研究対象に据え、教育実践の分析と学習者の教育体験を構造的に捉えることで、言語教育研究にとっても一定の理論的意義があると考えられる。

本研究は、近代における日中の教育交流の歴史を踏まえながら、大平学校の実践が1972年の日中国交回復以後の約40年にわたる日中交流に与えた影響を検証するとともに、外国語学習を通じての異文化間交流が個々人の人生に与えた意義を浮き彫りにすることも課題として設定する。

2. 本研究の研究視角

本研究は、大平学校の日本語教育の実践を通じて、日中教育文化交流の歩みを教育学の観点から分析するものである。本論は、以下の4つの視角から分析を進めるものとする。

第1に、日中両国間近代の交流史を踏まえて、日中国交回復以降の日本語教育が日中教育文化交流に与えた影響について、大平学校を中心として分析することである。

近代における日中教育文化交流は清朝末期から始まっている。中国では、清末期における日清戦争の敗北を機に、日本モデルの教育近代化が進み、日本人教習や教育顧問が、最盛期の1905～1906年頃には約600人を超える規模となり、中国の教育近代化に大きな役割を果たした⁷。来日する中国人留学生も増え、中国における日本語教育も展開するようになっていった。

しかしながら、こうした在華教育文化事業においては、事業の主体はあくまで日本であり、中国は事業の対象でしかなかった。このように、清末での日中の教育交流は一定の成果を挙げたものの、問題も多かった。そのため、1912年中華民国建国後は、アメリカの学校制度をモデルとした学校教育改革が展開されて、日中間の教育文化交流は衰退に向かう。

⁶ 本研究では言語学習をし続ける学習者の人生を指している。すなわち、言語学習によって人生はどのように変わるかを検証しようとするものである。

⁷ 蔭山雅博「清末における教育近代化過程と日本人教習」阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華教育事業』第一書房、1983年、8頁。

その後、日本は満州事変（1931年、中国語は九・一八事変）、盧溝橋事件（1937年）を発端として、日中全面戦争へと歩みを進めていく。そして占領下では植民地支配の手段として日本語を強制的に普及してきたといった歴史的経緯がある。

そのため戦後日本は日本語の海外普及に非常に慎重な態度を取り、相手国・地域のニーズに応える形で実施してきた⁸。日中国交回復及び中国の改革開放政策の中で、中国の近代化に協力し、さらに日中の恒久平和を目指しての日本語教育が大平学校において展開されるようになるのである。

現在、日中国交回復40周年を迎え、日中関係は様々な軋轢を抱えているが、その故にこそ日中間の教育交流の歴史を鑑みること、新しい日中関係を如何に構築するか、日中教育文化交流の在り方を再検討する必要があるだろう。

第2に、異文化間教育の分析である。

日中友好という特殊な時代背景の中で展開された大平学校の教育実践ではあるが、異文化間交流の中で、学び合う共同体が形成され、その影響は現在にまで続いている。それでは、なぜ、こうした教育実践が可能となったのか、その時代背景や教育学的意味について検証していく。

現代社会においては、グローバル化が進む中、国境を越えて移動する人々の数も増大し、母国以外の場所に住み、仕事をする人も増えている。自国内でも様々な文化的・言語的背景を持つ人々と意思の疎通を図るためには、母語以外の新たな言語の習得の必要な場合が増えている。

しかし、「たとえ共通語を習得し、その言語を使って互いにコミュニケーションを図ろうとしても、異なる文化的・言語的背景を持つ人々は、しばしば文化的前提や解釈の枠組みを共有していないことが多い。その結果、同じ言語で話していても、異民族間コミュニケーションや異文化コミュニケーション上の困難な問題がしばしば起こる」。移動が容易になると同時に、移動に伴って生じる問題が複雑化しつつある。

しかしながら、大平学校においては、日中両国間の約700人が集まり、異文化交流・体験・葛藤の中で、学び合う共同体を作り上げていった。こうした共同体が、その後の日中教育文化交流においても、大きな役割を果たすことが可能となった。そのため、本研究では外国語教育という異文化間交流、異文化間教育の場を通じての教師や学習者双方の自己変容に注目し、分析を進めることとする。

⁸ 総合研究開発機構『日本語教育及び日本語普及活動の現状と課題』、1985年、5～15頁。

第3に、外国語教育という言語教育が個人の人生に与える影響を分析することである。

言語は人をつくり、文化をつくり、社会を作る。細川英雄が指摘したように、「言語教育そのものが人間形成の支援であり、人間によって行われる文化的かつ社会的な営みであるという視点に立てば、ことばの学習／教育の社会的・文化的意味を問うという行為は当然のこととして、非母語話者に対する「日本語」教育と母語話者に対する「国語」教育、そして国際化のための「英語」教育といった見方への変容も迫ることになるだろう」⁹。その意味で、単なる手段としての外国語教育ということではなく、人間形成の為の言語教育として外国語教育を捉える必要があるのではなかろうか。

外国語教育は時代背景の影響を色濃く受けるものである。外国語教育の実態を歴史的に見ていくと、ある時にある場所で理想的だとされた教育実践が、次の時代には古いものとされ、また別の新しい教授法などが採用されていくことがある。急激な社会の変化に人々の日常生活は変化しているが、学生も教師もそれを取り巻く価値観も急には変わらずに、立ち往生している。

本論では時代背景を縦軸とし、個人の人生を横軸としながら、その織りなす諸相を描き出していきたい。そして人間形成としての外国語教育を検証し、言語学習の社会的・文化的意味を問い直していくものとする。本論は日本語教育研究や言語教育研究にとっても、新しい知見を提供することを目指している。

第4に、生涯学習としての言語教育の意味を明らかにすることである。近年インターネットの普及によってグローバル化が一層進み、人的交流・異文化との接触・交流は、国境を越えて身近なものになっている。言葉は、考える力や生きる力を育み、人間形成に影響を与える。伝統的な学校型の言語教育、すなわち、教師から生徒に知識を伝授する教育の行き詰まりが議論になり、言語の学習観・教育観が、改めて検討の対象になっている。

周知の通り、生涯学習は「いつでも、どこでも、だれでも」学べるよう、「知」を客観的に規範化することである。この目的を達成しようとするなら、従来の学校型の教育観は克服、ないしは転換することが求められる。

大平学校での日本語教師の学びは、学校教育終了後の継続教育、すなわち生涯学習としての日本語教育であった。大平学校での学びを通じて、日本語教師たちは、新たな学習観を獲得し、またセカンドチャンスを与えられ、文革で失った人生を取り戻すことになった。また日本人教員側の言語教育を通しての異文化体験も、生涯学習となったとも言えよう。

⁹ 細川英雄（編）『言語教育とアイデンティティ』春風社、2011年、3頁。

その意味で、本論の検証を通じて、生涯学習としての言語教育が持つ意味を明らかにしていきたい。

3. 先行研究と本研究の意義

(1) 日中教育文化交流に関する研究

戦前の日中教育文化交流と摩擦に関する研究としては、阿部洋が編集した『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華教育事業』¹⁰が代表的なものとしてある。同研究は、戦前日本が中国において実施してきた教育事業の諸相及び中国側の対応を解明し、主に以下の側面について論述している。①清末における日本人教習・顧問の中国教育近代化に果たした役割、②1920年代における日本の中国に対する教育関与、③外国人の在華教育事業に対する中国側の対応としての「教育権回収運動」の理論とその展開相がそれである。

上記の研究の中で蔭山は清末における日本人教習について、「日本をモデルとして近代化を図る中国が行う事業に協力し補佐する人材であり、中国各地に招かれて師範教育、陸軍教育、普通教育、実業教育、法政経済の教育、警察教育、医学教育、日本語学などの教育事業に参加した」¹¹と述べられている。しかし、それと同時に、教習の派遣は「遅れて近代国家として出発した日本の、国策としての大陸進出の有力な手がかりにしようとする考えがあった」¹²ことも指摘されている。

戦前日本における代表的な対中国文化交流団体として東亜同文会(1898～1946年)がある。東亜同文会では、上海に東亜同文書院を設立し、中国にいる日本人に中国語教育を行った他、東京に東京同文書院を設立し、中国人留学生を受け入れた。その他、天津中日学院など、中国人のための日本語教育機関を運営した。

一方、1920年代後半期における国民革命の劇的昂揚という時代背景の下で、ナショナリズムの教育的表現としての教育権回収運動(中国の主権として教育権を回収しようとする運動)がミッション系の学校、あるいは日本人を含めて外国人経営による学校で展開されている。こうした中で、両国間の交流が決定的な打撃をうけるのは、阿部が指摘したように、1931年9月におこった「満州事変」である¹³。

¹⁰ 阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華教育事業』第一書房、1983年。

¹¹ 蔭山雅博、同上書、1983年、7～9頁。

¹² 蔭山雅博、同上書、1983年、7頁。

¹³ 阿部洋「東亜同文会の中国人教育事業—1920年代後半期、国民政府の教育権回収政策との対応をめぐる」、前掲書、1983年、255頁。

このように、戦前における日中教育文化交流は中国の主権が侵害され、中国側はその反発として教育主権の回収に努めた。阿部は一連の共同研究に共通する問題認識について、『日中教育文化交流と摩擦—戦前日本の在華教育事業』の序文の中で、「かつての失敗、挫折の経緯や、その構造的要因を徹底的に解明する」¹⁴必要性があると記している。阿部の研究は、このため民国時期を中心としている。本研究は、こうした阿部の基本的な問題意識に立脚しながら、戦後、日中国交回復以降について扱うものである。

戦後、特に日中国交正常化以降、戦前における日中教育文化交流の失敗を反省し、教育文化交流は相互の主権を尊重した上、日中双方が協力しあい、緊密に行ってきた。その時期を扱った、代表的な研究として、王雪萍（2004, 2009）¹⁵と酒井順一郎（2011）¹⁶などが挙げられる。王と酒井は1979年に設立された「中国赴日本国留学予備学校」を事例に、留学生政策や予備学校での日本語教育を中心に論じてきた。中国人日本留学史及び日中教育文化交流史における両者の研究の意義は深く、同時代の大平学校の研究に与える示唆に富んでいる。しかしながら、中国赴日本国留学予備学校は1980年代の理工系の学部生を中心としている。そのため、留学生が果たした役割は、日本語教師である大平学校の学習者とは異なる。

また、田中祐輔（2012）¹⁷は、1949年以降の中国の日本語教育現場における潜在意識や慣習に規定される日本の国語教育の影響について明らかにした。とりわけ1980年代に国語教諭が都道府県の教育委員会の派遣により日本語教育の専門家として中国で活躍した事例に注目した。しかし、田中の研究は教科書の比較を中心に行っており、国語教諭の教育実践及び相互交流の実態解明という視点が欠落している。

（2）異文化間教育に関する研究

異文化間教育とは、「異文化との接触や交流を契機として、あるいは異文化との接触と相互作用が恒常的に存在する構造的条件のもとで展開する、人間形成にかかわる文化的過程

¹⁴ 阿部洋、前掲書の序文、1983年。

¹⁵ 王雪萍『当代中国留学政策研究—1980—1984年赴日国家公派本科留学生政策始末（現代中国の留学政策に関する研究—1980～1984年—赴日本国国費派遣学部留学政策の始末）』、世界知識出版社、2009年。王雪萍「改革開放期の中国政府派遣留学生—日本への国費派遣学部留学生を中心に」富士ゼロックス 小林節太郎記念基金 2002/2003年度研究助成論文、2004年。

¹⁶ 酒井順一郎「中国赴日本国留学生予備学校における日中教育文化交流」『日本語教育史論考第二輯』刊行委員会編『日本語教育史論考第二輯』冬至書房、2011年。

¹⁷ 田中祐輔『中国の大学専攻日本語教育の研究—文学思想による規定と日本の国語教育からの影響—』早稲田大学博士学位論文、2012年。

ないし活動」¹⁸である。1980年代以来、日本では帰国子女の教育が問題になり、異文化間教育が脚光を浴びるようになった。現在、異文化間教育学の研究対象としては、「海外帰国子女教育・留学生教育・外国人児童生徒の教育・外国語教育・日本語教育・異文化間コミュニケーション・多文化教育など、主として日本の教育の国際化に関わる事象」¹⁹がある。

本研究で大平学校における異文化間教育に注目する理由は、日本人教師が海外で行った異文化間教育として、大平学校が大きな成果を上げた事例として考えることができる点である。今後の外国語教育を進めていく上で、大平学校ではいかに異質な集団で相互交流し、葛藤を乗り越え、協力関係を形成し、維持してきたかを再検討することは意義深い。

異文化間教育は「ある種の意図的・計画的・実践的教育活動の次元にかかわる概念である。そうした活動には、その基本方針ないし指導原理として、国際協力の精神や資質、地球市民精神の育成というような、国際化時代の教育のあるべき姿についてのある種の理念や規範」²⁰が含まれている。日中双方の連携による大平学校は、現在の異文化間教育に大きな示唆を与えるものと考えられることができる。

また、異文化間教師教育の先行研究は少ないものの、鈴木（2011）²¹が注目される。鈴木は教員の異文化体験を考察し、異文化間教育における人をつなぐような資質を持つ教師について究明した。また、星野（2007）²²、森茂（2007）²³、中山（2007）²⁴、田淵（2007）²⁵などの研究では、異文化間教育の視点から教師教育が実施されている諸外国の事例が紹介され、異文化間教育の資質を備えた教師の育成やその支援など、日本の抱える課題を探究した。しかし、日本人による海外での教師教育実践に関する議論については言及されてい

¹⁸ 江淵一公「異文化間教育と多文化教育—研究の意義と課題」異文化間教育学会編『異文化間教育』7号、アカデミア出版会、1993年、14頁。

¹⁹ 小島勝「第1章 異文化間教育学の研究課題と研究の観点」『異文化間教育学の研究』ナカニシヤ出版、2008年、1頁。

²⁰ 江淵一公編集『異文化間教育研究入門』、『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部、1997年、18～19頁。

²¹ 鈴木京子「教員の異文化体験—REXプログラムに参加した教員の聞き取り調査から—」『異言語と出会う、異文化と出会う』風間書房、2011年、48頁。

²² 星野命「異文化間教育と多文化（共生）教育における教師と教師教育（総論）」異文化間教育学会編『異文化間教育』25号「特集 異文化間教育と教師」、アカデミア出版会、2007年、3～21頁。

²³ 森茂岳雄「アメリカにおける多文化教師教育の展開と課題」異文化間教育学会編『異文化間教育』25号「特集 異文化間教育と教師」、アカデミア出版会、2007年、22～34頁。

²⁴ 中山あおい「言語的、文化的多様性に対するドイツの教師教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』25号「特集 異文化間教育と教師」、アカデミア出版会、2007年、35～44頁。

²⁵ 田淵五十生「日本の教師教育と異文化間教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』25号「特集 異文化間教育と教師」、アカデミア出版会、2007年、45～57頁。

ない。

(3) 大平学校に関する研究

大平学校に関しては、記念論文や雑誌記事などが数多く蓄積されている。ただし、これらはいずれも体系的な研究とはいえない。

本研究にとって示唆となる先行研究としては、椎名和男（元国際交流基金日本研究部長・大平学校の創始者の1人）（2007）²⁶、沈国威（元北京語言学院講師・大平学校3期生）（2010）、²⁷『大平学校的前世与今生』（2012）²⁸、小熊旭・川島真（2012）²⁹などが挙げられる。

しかし、これらの研究は大平学校の存在意義を高く評価しているが、大平学校の概況、あるいは事業紹介にとどまり、日本語教育分野への具体的影響や、それにもとづく日中交流の展開について有効な視点を提供しきれていないといえない。

一方、1985年以降、大平学校は北京日本学研究中心（北京外国語大学と北京大学内に移転）に形を変えながらも今日まで継承されている。このセンターに所属している曹大峰・徐一平らの研究、曹大峰（2006）³⁰、徐一平（2010）³¹、徐一平・曹大峰（2013）³²などの研究は、大平学校を北京日本学研究中心の前身としての歴史的経緯を明らかにし、評価したものである。ただし、センターの沿革としての記述の域を出ない。

そうしたなか、大山正博³³の研究は一定の評価ができる。大山の研究は日中国際文化交

²⁶ 椎名和男「忘れ得ぬ先達の思い出と若き人々への期待」『日本語教育』（135）、2007年、35～40頁。

²⁷ 沈国威「日本研究専門家学者的揺籃：“大平班”（日本研究専門家の揺籃：『大平学校』）」『大潮涌動：改革開放与留学日本』社会科学文献出版社、2010年、79～87頁。

²⁸ 『蔚藍』専門誌特集号『大平班及北京日本学研究中心知名校友訪談集—大平班的前世与今生（大平学校及び北京日本学研究中心—著名校友インタビュー—大平学校の前世と今生）』、2012年。

²⁹ 小熊旭・川島真『『大平学校』とは何か（1980年）—日中知的交流事業の紆余曲折』園田茂人編『日中関係史1972-2012 III社会・文化』東京大学出版会、2012年、53～80頁。

³⁰ 篠崎摂子・曹大峰「中国における非母語話者日本語教師教育の展開—「大平学校」と北京日本学研究中心—」『国際交流基金日本語教育紀要』（2）、2006年、135～140頁。

³¹ 徐一平「大平正芳と中国の日本語教育」『大平正芳からいま学ぶこと—大平正芳生誕100周年記念—』桜美林大学北東アジア総合研究所、2010年、38～53頁。

³² 徐一平・曹大峰編集『中日教育合作実践与成效研究—以「大平班」和北京日本学研究中心為例（中日教育協力の実践と効果に関する研究—大平学校と北京日本学研究中心を例に）』、学苑出版社、2013年。

³³ 大山正博『大平学校にみる日中国際文化交流の意義と実践』神戸大学修士学位申請論文、2009年。

流という視点から、大平学校の関係者にインタビューをし、大平学校の実状及びその意義を検証したものである。そのなかで、大平学校の最大の成功は「人と人とのつながり」による土台が構築できたことであると指摘した。しかし、大平学校の時代が中心であり、大平学校のその後の継承及び展開については記述されていない。

このように見ていくと、大平学校に関連する研究は単に日本語教育を視野に入れるだけではなく、言語教育政策、日中教育文化交流、留学生教育、日中関係など、多領域へ広がってきたことが分かる。その背後には、国語・日本語教育からの日本語教育学の成立、また、言語教育の領域における言語の研究から人間形成の研究へといったパラダイムシフトがあるといえよう。

本研究では、こうした大平学校に関する研究の蓄積の上に、外国語教育について、その時代背景を縦軸とし、個人の人生を横軸としながら、その織りなす諸相を描き出すことに努めたい。

4. 研究方法

本研究の研究方法について、以下に述べる。

(1) 第1次資料

本研究では外務省、国際交流基金の内部資料、大平学校に赴任した教師側の所蔵資料、当時使用していた教科書やプリント、研修を受けた中国人教師が保存していた資料などを分析する。具体的には、当時大平学校での配布資料や大平学校終了直後に出版された『記念文集—日語教師培訓班的五年』³⁴、国際交流基金関連資料「報告書要旨」、大平学校の配布資料、北京日本学術研究センターの資料などといった史資料を検証する。

これらの資料を年代順で追ってみると、「宣伝期」、「沈黙期」、「評価期」という三つの段階に分けることが出来る。

第1段階(宣伝期)は1980年代である。主に日本側が主体となり、現地に赴任した日本人教師が書いた紹介・感想である。代表的なものは佐治圭三(1980,1981,1985,1987)の関連記事³⁵である。また佐治や、赴任した日本人講師の報告が1981年の『言語生活』の「中国

³⁴ 北京語言学院日語教師培訓班編『記念文集—日語教師培訓班的五年(記念文集—日本語教師研修班的五年)』国際交流基金、1987年。

³⁵ 佐治圭三「中国における日本語教育」『言語生活』(345)、1980年、70～83頁。「北京の春」『言語生活』(355)、1981年、76～80頁。「中国における日本語教育」『日本語教育およ

だより」1～6号に連載され、当時の中国の教育事情や中国人研修生の様子などが紹介されている。また、記念文集³⁶、論文集³⁷などもある。

さらに、大平学校で教鞭を執った竹中憲一³⁸は大平学校及び中国全体の日本語教育の事情を簡潔にまとめている。すなわち、1980年代は日本語教育が再開されたばかりの時期であり、日本としては大平学校を通して、まず中国における日本語教育の実態を把握するため、大規模な調査をしている。日中共同事業としての大平学校の事業を如何に世間にアピールするかという時期であった。

こうした資料は日本人講師の実体験及び当時の感受性をそのまま記述した貴重な資料であり、大平学校を研究する上では不可欠である。一方、自分が関わっている事業であるため、宣伝の色合が濃い点は避けられないようである。

その後、第2段階の1990年代は沈黙段階である(沈黙期)。管見の限り、10年の間で大平学校に関する研究はほとんどなされていない。この間、大平学校の研修生たちはまだ日本留学や各自の教育現場で地道に努力しているものの、注目されていなかったと考えられる。

第3段階(評価期)として、2000年代は大平学校の20周年を記念に、在日ジャーナリストの莫邦富³⁹(元上海外国語学院講師・大平学校の1期生)が大平学校のブームを再び引き起こした。また、北京日本学研究中心の20周年及び前身としての大平学校の25周年、2010年30周年、大平正芳生誕100周年記念、日中国交正常化40周年記念などの記念行事に際して、関連の論文や著書が現れている。

このように、大平学校に関する資料の特徴としては、日本側の主導の宣伝期から、沈黙期を経て、さらに日中協力のモデル事業として大平学校を評価する評価期へと変化している。

なお、大平学校の先行研究の多くは、外交資料、教育実践資料などの第1次資料の不足、

び日本語普及活動の現状と課題』総合研究開発機構、1985年。「日本語研修センターの五年」北京語言学院日語教師培訓班編集、前掲書、国際交流基金、1987年。

³⁶ 北京語言学院日語教師培訓班編集、前掲書、国際交流基金、1987年。

³⁷ 『日本語教育研究論纂』(第1～4集)、国際交流基金、1982～1985年。

³⁸ 竹中憲一「中国における日本語教育」『早稲田大学社会科学研究所社研・研究シリーズ』(23)、1988年、49～79頁。

³⁹ 莫邦富「大平学校を思い起こせ」『中央公論』116(4)、2001年、104～111頁。「忘れぬ大平学校の日々」『これは私が愛した日本なのか』岩波書店、2002年。「大平学校をご存じですか--終了から20年、卒業生の歩みをたどる」『遠近』(6)、2005年、15～20頁。

全体の構造の理解及び個別の実証の深化が欠けている。そのため、本研究においては、大平学校の時代、すなわち 1970 年代末から 1980 年の日中関係の資料、外交、文化政策に関する第 1 次資料を発掘しながら、大平学校の全貌を明らかにすることを試みた。

(2) インタビュー調査

①調査の概要

本研究は、大平学校で教鞭を執った日本人講師及びそこで学んだ中国人研修生の具体的な経験とそれに対する意味づけを明らかにすることを目的しているため、インタビューの手法を採用し、ライフストーリーの聞き取り調査を行った。

大平学校に赴任し教鞭を執った日本人教員と研修を受けた中国人教員については、半構造化インタビューを実施した。中国の教育現場で日本人教師は何を得たのか、この体験が自分の人生にどんな影響を与えたのかを調査した。また大平学校で学んだことをどのように消化し、自分のものとして行ったか、また日本人教師に学んだことをどのように自分のものとして内面化していったのかを中国人研修生たちに対してはインタビューした。

調査協力者は、スノーボール・サンプリング法によって選んだ 1980 年～1985 年における大平学校の関係者 49 名である。2012 年～2014 年に、筆者は日中両国間を往復しながら、1 人 1～3 回、1～8 時間程度のインタビューを行った。

本論文においては、30 年後の現在から当時のことを振り返ることで、彼／彼女らを取り巻く社会環境の変化と個々人の意識変容についてマクロとミクロの二つの視点から分析していきたい。「人は、1 人では質的研究ができない」⁴⁰。すなわち、質的研究は研究者だけの作業ではなく、以上の調査協力者との共同作業、関係性の構築によって初めて研究が進められる。

また「客観的な事実」として描き出してきたものが、誰にとっての「事実」か、つまり当事者の視点から問い直す必要があるという点であり、さらにその「分析枠組みの妥当性の再考」⁴¹も必要である。本論文においては、個人の語りを歴史的な事実と突き合わせながら論じることに留意した。また研究者の分析視点にはイデオロギー的な偏向が含まれないよう、「傾聴・受容と同時に相対化のスタンスを取る」⁴²ということにも心掛けた。

⁴⁰ 川野健治「臨床・社会心理学における質的研究の留意点」秋田喜代美・能智正博 監修 能智正博・川野健治編『はじめての質的研究法—臨床・社会編』東京図書、2007 年、68 頁。

⁴¹ 佐藤郡衛、前掲書、39 頁。

⁴² 藤原顕「教師の語り—ナラティブとライフヒストリー」秋田喜代美・能智正博 監修／秋

調査協力者の概要は表 0-1 の通りである。

表 0-1 調査協力者一覧表

2014 年 9 月 28 日現在 49 名

組	番号	性別	年齢	インタビュー時間	調査地	当時	現職
日 本 人	T1	男	60代	2012年1月19日	東京	事務・教師	教授
	T2	女	60代	2012年6月6日	東京	通訳・教師	教授
	T3	男	60代	2013年7月12日	東京	短期講師	教授
	T4	男	60代	2013年9月11日	大阪	通訳・教師	助教授
	T5	男	70代	2013年12月8日	名古屋	副団長	教授(定)
	T6	男	50代	2014年1月15日	奈良	短期講師	教授
	T7	女	60代	2014年1月16日	大阪	長期講師	教授(定)
	T8	男	50代	2014年3月17日	奈良	通訳・講師	教授
	T9	女	80代	2014年6月15日	奈良	短期講師	講師(定)
	T10	男	80代	2014年7月3日	東京	短期講師	教授(定)
	T11	女	60代	2014年9月28日	筑波	長期講師	教授
	G1	男	80代	2012年9月13日	東京	国際交流基金	教授(定)
	G2	男	60代	2013年9月4日	東京	訪日研修担当	
	G3	男	70代	2014年2月10日	東京	外務省事務官	
	G4	男	80代	2014年3月22日	東京	元議員	
	K1	女	60代	2013年12月8日	名古屋	副団長夫人	
	K2	女	80代	2014年1月15日	大阪	団長夫人	
	K3	男	70代	2013年12月5日	東京	北京大学赴任	教授
	K4	男	80代	2014年6月15日	奈良	大連外大赴任	教授
		D1	女	60代	2012年9月26日	天津	4期生
E1		女	60代	2012年9月26日	天津	5期生	教授(定)
C1		女	60代	2012年9月26日	天津	3期生	教授

田喜代美・藤江康彦 編『はじめての質的研究法—教育・学習編』東京図書、2007年、352頁。

中国人 研修生	B1	男	50代	2012年10月11日	北京	2期生	教授
	A1	男	60代	2012年10月11日	北京	1期生	教授
	A2	男	60代	2013年1月9日	東京	1期生	非常勤講師
	B2	男	60代	2013年4月3日	東京	2期生	起業家
	A3	男	50代	2013年4月27日	山梨	1期生	非常勤講師
	D2	男	60代	2013年4月27日	山梨	4期生	教授
	D3	男	50代	2013年6月25日	上海	4期生	教授
	A4	女	60代	2013年6月26日	上海	1期生	教授(定)
	D4	女	60代	2013年6月26日	上海	4期生	教授(定)
	D5	女	50代	2013年6月26日	上海	4期生	教授
	B3	男	60代	2013年6月26日	上海	2期生	教授(定)
	C2	男	60代	2013年6月26日	上海	3期生	教授(定)
	C3	男	60代	2013年6月27日	上海	3期生	教授
	C4	男	60代	2013年6月27日	上海	3期生	教授(定)
	D6	女	60代	2013年6月27日	上海	4期生	教授
	A5	女	60代	2013年6月29日	上海	1期生	教授(定)
	E2	女	60代	2013年8月12日	東京	5期生	教授(定)
	E3	女	50代	2013年8月20日	神奈川	5期生	教授
	E4	男	50代	2013年8月20日	神奈川	5期生	教授
	E5	女	50代	2013年8月20日	神奈川	5期生	講師
	E6	男	50代	2013年9月12日	広島	5期生	教授
	C5	男	50代	2013年9月13日	大阪	3期生	教授
	E7	女	50代	2014年4月5日	東京	5期生	非常勤講師
	E8	女	50代	2014年4月6日	京都	5期生	非常勤講師
B4	女	50代	2014年4月6日	大阪	2期生	非常勤講師	
A6	男	50代	2014年4月7日	大阪	1期生	教授	
B5	女	80代	2014年7月3日	神奈川	2期生	副教授(定)	

注：Tは日本人講師を指す。Gは外務省関係者を指す。Kは日本人講師の家族を指す。Aは

1 期生、B は 2 期生、C は 3 期生、D は 4 期生、E は 5 期生を指す。数字はインタビューの時間順を示したものである。(定) は定年退職の略である。

②調査内容

- ・大平学校以前：日本語との最初の出会いや自らの学習経験及び教育経験
- ・大平学校：日本人教師による教師教育の経験、その実態と自分の変化
- ・大平学校以後：大平学校での 1 年が自分自身の人生・キャリアに与えた影響

このような調査内容によって、研修が自分の人生に及ぼした影響、また社会的な影響を把握することができる考えた。

インタビューの内容は調査協力者の同意を得て、IC レコーダーに録音し、文字起こしを行った。インタビューの際に、中国語を使った場合、その内容は筆者が日本語に翻訳した。

5. 本研究の構成

本研究は、まず日中関係の時代背景、言語教育の具体的な政策、教育実践について分析する。その上で視点を教育・言語政策から人々の内的な世界や人生へと移すことで、大平学校の教育実践の本質に迫ろうとする。本論文は、以下 8 つの章から構成されている。

序論

- 第 1 節 課題設定
- 第 2 節 本研究の研究視角
- 第 3 節 先行研究と本研究の意義
- 第 4 節 研究方法
- 第 5 節 本研究の構成

本論

- 第 1 章 中国における言語教育の歴史的変遷
 - 第 1 節 中国における言語教育政策に関する研究
 - 第 2 節 中国における外国語教育の歴史的変遷
 - 第 3 節 中国における日本語教育の変遷
- 第 2 章 大平学校の設立経緯
 - 第 1 節 日中教育文化交流の歴史
 - 第 2 節 大平学校以前の中国における日本語教育の実態

第3節 戦後日本の日本語普及活動の展開

第4節 大平正芳と日中交流

第3章 大平学校の教育実践

第1節 大平学校の開校準備

第2節 大平学校の教育実践

第3節 訪日研修

第4章 大平学校の日本人講師とその諸相

第1節 大平学校に至るまで

第2節 中国での異文化体験

第3節 日本人教師にとっての大平学校の教育的意義

第5章 大平学校と研修生たちのその後

第1節 中国における日本語教育の質的な変化

第2節 日本で活躍している大平学校の研修生たち

第3節 大平学校の特質とその意義

結論

第6章 総合考察とまとめ

第1節 各章のまとめ

第2節 全体の考察

第3節 今後の外国語教育に関する提言

第4節 今後の研究課題

補論

留学生による在日中国人児童の支援活動—大平学校「孫世代」のケーススタディ

第1節 留学生による在日中国人児童生徒の社会適応支援事業

第2節 荒川区の小学校における中国人児童の実態

第3節 在日中国人児童の支援活動における留学生の役割

6. 各章の概要

序論では、本研究の社会背景及び問題の所在について述べた。そして、①日中 100 年の交流史を踏まえて、日中国交回復以降の日本語教育が日中教育文化交流に与えた影響について大平学校を中心として分析すること、②文化間教育の分析、③外国語教育という言葉

教育が個人の人生に与える影響を分析すること、④生涯学習としての言語教育の意味を明らかにすること、といった以上4点の研究視角について説明した。

また第3節は先行研究を整理した。まず、日中教育文化交流に関する阿部洋などの研究を踏まえた上で、日中教育文化交流の歴史への反省という問題意識の上に、大平学校の事例を検討していくことを述べた。また大平学校に関する先行研究の蓄積の少なさについて言及した。

第4節では、本研究の研究方法について論述した。まず、大平学校については、全貌が明らかにされていないため、第1次資料を発掘し、それに基づきながら実証的に論を進めることの必要性を述べた。さらに個々人の生涯に与える外国語教育の影響を考察することで生涯学習の視点から言語と人生を究明するために、インタビューという手法を用いライフストーリーに依拠しながら論じるとする研究上の方法論について論じた。また、第5節では、本論の構成について述べた。

第1章では、中国における言語教育の歴史及び実態について整理することによって、大平学校の誕生の土壌となる中国における言語教育の歴史とその実態を明らかにした。

まず、第1節で中国における言語教育政策に関する研究を概説した。第2節は中国における外国語教育の歴史の変遷についてまとめた。ロシア語一辺倒から、文革中における鎖国状態、さらに改革開放期における資本主義諸国への関心の高まりと外国語学習熱が、検証されている。さらに、第3節では、中国における日本語教育に焦点を当て、その歴史変遷に関する研究を検討してきた。そして中国における日本語教育は、1949年の中華人民共和国建国から70年代にかけての時期（第1期）、次に1978年の改革開放政策開始から90年代前半にかけての時期（第2期）、続いて90年代後半から21世紀に向けた時期であり、現在に至っている（第3期）ことが論じられている。

第2章は1980年代に日中両国政府の協力による中国での日本語教育及び日中交流の展開について、その社会的背景から考察し、日中の歴史的な経緯の中で誕生した大平学校の設立の経緯を明らかにしてきた。第1節では、大平学校の前史となる日中教育文化交流について、歴史の変遷を概観した。第2節は日本語教育に焦点を当て、大平学校の設立以前（文革期）の中国における日本語教育の実態について考察した。第3節では、国際交流基金の日本語普及活動や大平学校の出発点となる日本語巡回指導について論じた。第4節は大平正芳内閣時の日中の協力の背景について論述し、大平正芳首相（当時）の経歴と大平学校との関係についても検討した。

その結果、大平学校の設立の背景・経緯としては、以下の4点にまとめることができる。①中国における外国語教育の必要性。②日本側が日本語普及の一環として、大平学校の設立に可能性を見出したこと。③日本国際交流基金による中国での日本語巡回指導の実施が、日中の日本語教育界の接触を実現させ、大平学校成立の道を開いたこと。④歴史的経緯から見ると、大平正芳個人の戦時中、中国滞在の経験及び彼の外交戦略も影響を与えたこと。以上の経緯によって、日中のニーズに合致した大平学校が誕生したことを解明した。

第3章では、大平学校の教育の実態（教育内容・教授法・教材・試験・研究意識）と異文化間教育の要素（相互作用・訪日研修・日中相互のパイプ役）について分析し、1980年代における日本語教育の実態及び日中教育文化交流の一端を明らかにし、大平学校での研修と訪日研修の影響及び役割を明らかにした。

まず、大平学校での研修については、文革後中国における日本語教師の再教育を中心とし、研修生は全国各地の大学や研究機関から選ばれた。また、日本側は優れた教授陣を派遣し、中国現地の教師・スタッフと互いに協力し合い、教育実践を行っていた。大平学校は日中双方の努力によって教育実践の場を提供した。

次に1か月の訪日研修を通して、研修生は日本を理解すると同時に自国の問題点に気づき、客観的に両国をみるできるようになった。また、社会主義と資本主義という体制の違いがありながらも、教師たちが相互理解に努めていたことが明らかにされた。

大平学校は、文革後、改革開放初期に中国における日本語教育の発展や学術成果の交流、日本語教師の日本に対する認識と理解の上で重要な筋道となっている。大平学校での経験は日本に対する「開眼」と言っても過言ではない。お互い身近な交流が初めて実現され、相互理解を促し、日中教育文化交流に大きな役割を果たしたのである。

第4章では、大平学校にかかわった100名近い日本人学者、関係者について検証し、彼らにとって、この大平学校が如何なる意義を有するのか考察した。第1節では、大平学校に至るまでの教師の経歴や赴任するきっかけと原因を探った。第2節では、大平学校での教育と異文化体験まで踏み込んで記述した。第3節では、総括として日本人講師にとっての大平学校時代の教育的意義を考察した。

その結果、第1に、大平学校に派遣された日本人教師は、「優れた日本語教師」であり、「優れた研究者」であり、「優れた人間」という3つの要素から成り立っていることが分かった。そして彼らの専門である日本語教育の内容・方法を中国において実地検証した。阿部洋が明らかにした清朝末期の「素行が修まらない」在華日本人教習とは異なり、当時の

大平学校は、「向上心があり、前向きな教授陣だった」のである。

2点目は、日中の教育関係者における交流が大きく広がったことである。大平学校の中国人研修生 600 名と 100 名を越すといわれる日本人教師の中には、当時の中日を代表する一流の人物が揃っており、双方がお互いに影響しあった。

第3は、日本人教師の中国観、世界観がこの大平学校時代を通じて再構築されたことである。大部分の人は実際の中国や中国人に好意を寄せていたことが分かる。帰国後に、日中友好活動を支えるアクターとして活躍した。異文化間教育に携わる教師には、明確な哲学を持ち、その国の歴史を認識し、両国の平和の懸け橋になる資質を持ち、教育現場に信頼される人間性が求められている。大平学校での異文化間教育の体験は日本の教育界における国際理解、日本の各大学の国際化に意義があったと言えよう。

大平学校の目的は中国人の日本語教師の再教育、研修を通して、教師としてのレベルを高めることであったが、本論文で検証したように、大平学校の事業を開始した時には当初意図していなかった効果があった。例えば、日本人若手講師の学びや成長の場であり、そこでのネットワークが日中友好の道筋をつけたのである。

第5章では、大平学校及び研修生のその後について考察した。第1節では、中国における日本語教育の質的な変化から大平学校の影響について論じた。第2節は、日本で活躍している大平学校の研修生たちの動向についての考察である。第3節では、大平学校の特質とその意義について検討した。大平学校がその後中国の日本語教育に大きな役割を果たし、北京日本学研究中心も引き続き中国の日本語教育の発展に寄与していることを明らかにした。

大平学校研修生の個人レベルでは、以下のような成長が見られた。

第1、人格的・専門的能力の発達を助けた。

第2、新しい知識や技能を獲得することによって日本語教育を通して母国のために役立った。

第3、国際理解、特に日中友好を促進した。

ところで、中国在住グループの語りにおける主な内容は、教授法や研究能力などであり、日本語教育関係の話題が占める割合が大きかった。それに対して、日本在住の関係者は、特にその後、経済分野で活躍している人は1か月の訪日研修の影響が大きかったと語った。日本で、自分の人生について考え直し、中国を離れ、新たな人生を始めた。このように留学生生活を支えてくれた大平学校時代の日本人講師や仲間たちの絆について語ることが多い。

大平学校の修了生は現在日中両国で教育現場、経済分野で活躍している人もいれば、夢を叶えられなかった人もいる。大平学校は人生の転機であったが、その体験・経験をその後の人生にどう生かしていくかは、それぞれであった。大平学校はその当時の栄光であり、国の代表であり、責任感を感じつつも、誇りでもあった。インタビューを通じて、現在においても大平学校は彼らの青春時代の象徴として輝いていたことが、窺えた。

また、結論の後に、補論として、大平学校時代から30年後の現在での日本語教育現場で大平学校の「孫世代」、すなわち大平学校で教鞭をとった講師を第1世代とするならば、修了生である教え子(第2世代)の、そのまた教え子(第3世代)に当たる在日中国人留学生の日本での在日中国人児童への教育支援活動について検証した。

大平学校の孫世代が日本において日本の異文化間教育実践を支えていることに、大平学校の実践の深まりと発展を見ることができるのではなかろうか。

7. 結論と今後の課題

本研究は、清末民初から現在に至るまでの日中教育文化交流事業を視野に入れながら、文革終了後の改革開放時期に開設された大平学校に焦点を当て、マクロとミクロの双方の観点から論述してきた。

とりわけ大平学校の教育の政策背景、教育実態、個々人の変容、結果検証などの諸側面を考察してきた。具体的には、学び合う場としての大平学校に赴任した91名の日本人教師と600名の中国人日本語教師の間の相互理解、意識変容のプロセスにおいて、従来の中国における日本語教育の枠組みを超えた教育実践と、個々人の「言語人生」を研究対象に教育論的な探究をした。

各章での考察を踏まえて、大平学校については、以下のように結論として4点を挙げておきたい。

(1) 日中教育文化交流史の成功事例

大平学校は、日中教育文化交流史の中で、傑出して成功した事例であり、日中国交回復後40年間の日中関係に大きな役割を果たした。

大平学校によって、中国の日本語教育は改革され、日本語教育のレベルを向上させた。大平学校の設立は、中国の日本語教育にとって重要な転換点となったといえよう。

大平学校が成功した要因として、1972年の日中国交回復、1978年の日中平和友好条約の締結といった時代の流れの中で、双方のニーズに合致した教育政策であったことが背景に

ある。文革直後の中国は、文革の影響で社会が混乱し、停滞していた。一方で日本やアメリカは高度成長期で、中国にはそれに追いつかなければならないという風潮があった。大平学校は中国の成長を支援し、また中国政府も望んでいたため、このプロジェクトに協力的であった。また、日中国交回復が図られ、日本側としても中国に対する関心が極めて高い時期であった。財政的な余裕があった日本政府が、相互のニーズを確認し、合致させた側面もあった。

また、具体的な運営についての成功要因に関して言えば、①政府主導の下での計画的な実施。②日中政府の信頼と協力関係に基づき、日本側に全面的に委ねた教育活動。③日本側による一流の教授陣の派遣及び中国側による優秀な研修生の選抜、④当時喫緊の課題であった教師の質を向上させるための綿密かつ集中的な交流、以上が指摘できるのではなかろうか。

こうして実現した大平学校であったが、日本人講師は学習意欲に満ちた全国各地から選ばれた 600 名の研修生の誠実な態度に強く心が動かされた。また研修生は知識を学ぶと同時に、日本人講師の人徳を身につけていた。大平学校で研鑽を積むことが中国の日本語教師の重要な目標とまでなっていた。このように大平学校は理想的な異文化間交流、異文化間教育の場となっていたと言えよう。

さらに大平学校の修了生は、大平学校の 1 年間で視野を広げ、日本語能力を高め、所属の大学で大平学校方式の教育を実践した。そして現在に至るまで 30 年間にわたり中国の日本語教育を支えてきた。また研修修了後に中国全土、又は日本に散らばった後でも、同窓会を通してネットワークを形成し、ともに学び、助け合い、日中友好のアクターとして活躍してきた。

日本側においても、外国における日本語教育という点で、かつてない規模での実践の場であり、大平学校での授業実践を通じて日本における日本語教育は、その後、大きく発展を遂げていく。日本語教育発展の起爆剤としての役割を大平学校は果たしたのであり、日本語教育関係者にとっても貴重な学びの場であった。

日中友好のムードに沸く最中でも大平正芳は、「国と国との関係において最も大切なのは、国民の心と心の中に結ばれた強固な信頼であり、国民の間の相互理解の増進を図る一つの有力な手段が言語である」と看破していた。このことはその後の進展をみれば正鵠を射ていたことがわかる。日中双方のニーズに合致した大平学校という教育システムを築き、それが中核的役割を果たすことで、中国の日本語教育における礎と成り得た。また、さらに

日中交流を担う現地の人材育成につながり、今日にも繋がる堅固な人的ネットワークを構築するに至ったと言える。

大平学校は中国の日本語教育を支える人材を育てたプロジェクトであり、日中両政府の努力による成果を土台にして、30年以上にわたって日中関係の友好を築いてきた。しかし、現在、大平学校の関係者は定年退職や定年近くになっている。現在では日中関係も経済の発展と共に複雑化し、中国における日本語教育も質・量ともに転換期を迎えている。

今後、大平学校で築き上げてきた言語教育の基礎、日中両政府の連携、さらに人と人との絆など新たな可能性が見えてくる。大平学校を受け継ぐ次の世代は如何に新しい時代を切り拓いていくかが期待される。

(2) 外国語教育と個人の人生

言語教育、とりわけ外国語教育が個人の人生に持つ意義は重要である。本研究においては日本在住の大平学校の関係者や中国の北京・天津・上海などに住む49名の大平学校の関係者にインタビューをしてきた。彼らの「生の声」を通して、大平学校との出会い、大平学校での学び、そして大平学校での経験が、個々人のその後の人生に影響を与え、生き方や人生観が変容していったことを実証的に明らかにしてきた。その後、大平学校卒業生が日本及び中国社会にどのような影響を与え、日中関係にどのような役割を果たしてきたか、さらには異文化間教育の活性化にどのような示唆があるかについても探求した。

戦争から断絶へ、復帰から国交正常へ、脅威から協力へと20世紀の歩みにおいて日中関係が大きく変化する中で、言語教育と人的交流は時には促進され、時には時代に翻弄されてきた。各時代に生きている人々は、政治・政策の矛盾を抱えながらも、それらを取捨選択し、新たな日本語教育の歴史を作り上げてきたのである。

さらに研修生たちは資本主義の先進諸国と直接に接触し、訪日した際の衝撃は個々人の意識に変化をもたらした。大平学校の関係者は当時みな成人であり、社会的地位があり、世界観や価値観などもすでに形成されていた。しかし、大平学校での学びによってそれまでの価値観、教育観を新たにした。彼らは先進国の一つである日本に憧れたが、日本語の学習を通して自分自身も先進文化との接点ができることは、彼らにとってある種の誇りでもあった。大平学校での1年間は日本語教育を含め、研修生は様々な人と出会うことで、日中両国の繋がりや強さに気付くことになった。大平学校が研修生にもたらした効果は大きかったのである。

大平学校の研修に参加したことで、大学の教員としてのレベルをあげ、その後、中国の

高等教育機関で活躍することになる者が少なからずいた。また、ある者は、大平学校をきっかけとして、日本に留学し、その後、日中教育文化交流の上で、大きな役割を果たしている。外国語教育が、これだけ、人間の人生にとって大きな意味を持つことを、本論では多くの事例から明らかにしている。

(3) 生涯学習としての言語教育

また、大平学校での日本語教師の学びは、学校教育修了後の継続教育、すなわち生涯学習としての日本語教育であった。

大平学校に参加した多くの日本語教員は文革世代であり、文革により人生の方向転換を余儀なくされた世代であった。日本語を専門としながらも、その力量としては問題が多かった。こうしたハンディキャップをバネとして、研修生たちは大平学校で必死に学んだ。大平学校での学びを通じて、日本語教師たちは、セカンドチャンスを与えられ、文革で失った人生を取り戻すことになった。

改革開放三十数年以来、中国の日進月歩な発展は、文革世代の不屈の精神に大きく関わっている。彼らの波乱万丈な人生経験こそ、前進への原動力になったと考える。大平学校の文革世代の物語には同時代の中国の多くの人々の喜びと哀しみが込められている。彼らによって過去の人生の苦労や挫折の意味が、新しく「大切なことだった」と意味づけ直される。彼らはすべての人生の経験を、自分の学びとして意識しているのである。

さらに付言すれば、日本人教員側の異文化体験も、生涯学習としての外国語教育、言語教育であったとも言えよう。日本人教師たちは、日本の豊かな生活から離れて経済力の差が大きい中国に赴任し、苦しい条件の中で日本語教育の普及活動に携わった。そして今までの学校教育とは違い、自分の目で自分の足で中国という国を確かめ、心を開いて中国人と付き合い、中国観を更新し再構築していった。こうして、異文化に対する考えが変わり、新しい世界観・価値観が形成されていったとも考えることができる。

その意味で、本論の検証を通じて、生涯学習としての外国語教育、言語教育が持つ意味が再確認されたと考える。

(4) 学び合う共同体の構築

大平学校の日本人講師や中国人研修生の中には幼少期に直接戦争を体験し、また親世代が戦争に参加した人もいた。日中戦争と日本の軍事支配という歴史は、次世代に大きな影響を与えていた。大平学校に赴任した日本人講師は戦争を反省し、日中友好のために邁進した。日本の先進文化を学ぼうとする研修生たちの姿勢を感じ取った日本人講師たちは中

国の未来を背負って立つ学生たちを見て教える意欲が沸き上がった。

そして両者の意欲が相互に影響しあい、理想的な異文化間教育、理想的な学び合いの場となり得ていた。長期赴任の日本人講師たちは人民服を着て中国研修生たちの考え方、生活様式に合わせ、中国を理解しようとした。しかし、日本人講師の服装、持ち物などを見て、ある種のコンプレックスと憧れを持ち、先進諸国から学ぼうとする学生も多かった。

考え方の違い、生活様式の違いによって多少の問題も生じていたものの、日本語という共通の言語を学ぶことで、互いに理解が深まっていった。

大平学校が順調に歩みを進めることができたのは、その陰に日中相互理解を願う多くの思いがあったからである。大平学校は、異文化間における教師教育の形を新たに作り上げ、そして国籍や文化・民族にこだわりなく、多文化共生的公平な教育の場を作り上げていたのである。

修了後も大平学校は研修生だけでなく関係者同士の緊密なネットワークやその組織を保持してきた。1985年以降、日本と中国の間で行き来が頻繁になり、佐治圭三を中心に研究交流会や同窓会などが開かれ、大平学校の関係者が集まることで共同体意識が高まり、心の居場所となっていった。いつ修了したかにかかわらず、大平学校出身という連帯意識が生まれた。大平学校で共に学びすごした人々の交流と信頼関係は、月日が経つにつれて深まり、その関係性は同窓生から仲間、時には家族関係へと変化していった。

共同体という言葉は多様な意味で用いられているが、その要素として、「場の共有、相互交渉・コミュニケーション、文化の共有、連帯の絆」の4つが重要である⁴³。大平学校は研修生たちの学習と生活が展開する場であり、そこでの諸活動は日本人講師と中国人研修生の間で繰り返される相互交渉であり、異文化コミュニケーションである。その諸活動は、日中のさまざまな文化を取り込み、大平学校に特有な文化と連帯の絆を育んだ。

大平学校という場は、一人ひとりが日本・中国社会や日本・中国文化と積極的に関わることへの橋渡しの場であった。大平学校は日中間の異なる文化の中で教師教育活動を展開し、異文化交流を通して人間的な相互理解を促進した。そして相互作用の中で生じた価値の葛藤から、文化の融合へと向かい、新しい価値創造へと発展していったことを本論では実証的に検証した。

大平学校は日中の教師集団を専門家の共同体へと再構築した。共同体としての要素とし

⁴³ 佐伯胖・藤田英典・佐藤学（編）『シリーズ学びと文化 6 学び合う共同体』、東京大学出版会、1996年、はしがき iii。

て、①大平学校の講師と研修生たちは積極的協力的に教育実践に参加していること。②信頼と連携を育むネットワークを構築していること。③研修生たちに自信と心の居場所を提供できていることが挙げられる。

また、大平学校が学び合う共同体となり得たのは、佐治のような極めて優秀な研究者であり、同時に教育に情熱を持った日本語教育研究者がコーディネーターとしていたからとも言える。教育実践における優秀な教員というキーパーソンの重要性を、佐治の存在は改めて教えてくれるのではなかろうか。

今後の研究課題について、以下、3点について述べていきたい。

第1は、インタビューといった研究の手法に関わる課題である。本研究はインタビューを通して、大平学校の意義と役割を再検討しようとした。三十数年後の現在から当時を振り返ることで、大平学校の人生に対する影響、進路などを客観的に見ることができると考える。本論文で取り上げた四十数名の日本人専門家及び中国人研修生たちは当時の日中関係は親密的で、懐かしく語っていた。しかし、問題点もある。

まず、インタビュアーの「当たり前を疑う」ということである。T2は「大平学校はかなり昔のこと、どうしてもいい思い出が残る。あのころは良かった。なおかつ成功の人たちに話を聞けば、いい思い出で終わる可能性がある。しかし、必ずしもいい影響ばかりではない。その部分をどう引き出せるか」として、そうならないような視点が必要であることを述べていた。さらに人間の記憶の曖昧さについても言及していた。

筆者のインタビューは人から人への紹介でスノーボール・サンプリング方式に広がっていた。しかし、インタビューに応じてもらえない人もいて、自分の人生について語りたくない複雑な事情もあると推察された。大平学校の体験をもとに研修生たちはそれぞれの方向に向かって進み、現在があるのではないかと考える。

大平学校の研修生たちは自分がどう学んできたか、どのように変わったかについての自分の物語を持っている。人間が自分の過去を語ることは自分の人生を振り返って、現在の自分の位置・地位を確かめることである。そのプロセスを通して、過去を肯定し、現在の自分に自信を持ち、さらに今後プラス志向で歩もうとするものである。

筆者は大平学校の研究を通して、大平学校に対して点から線へ、そして面まで、立体像を描き出すことに努めてきた。大平学校の教育実践から、個々人及び日中教育文化交流への影響まで再現に尽力したが、時間と能力の限界もあり、現在社会的地位がある一部の人

の語りから大平学校を再構成している。彼らの青春時代は大平学校にあり、大平学校のポジティブな側面が中心となっていることに留意すべきであろう。

また、ある研修生へのインタビューから、大平学校を過度に評価してはいけないと考えた。A1は「大平学校は私の学問の道の起点であり、自分の人生にとって重要である。しかし、本格的に学問の道へと進んできたのは日本に来てからである。学問の深さからすると、日本での学びと仕事は、さらに重要だと思う。ただし、大平学校での経験は人生に良いきっかけを与えてくれて、今後の学問の基礎を築いてくれた」と語った。

A1は大平学校での研修を通して日本語の語学力や日本社会・文化に目を向けて、研究意識に問いかけ、学問の道を歩み始めており、大平学校はそのきっかけに過ぎないとしている。大平学校については、それぞれの捉え方があることを念頭に置くべきであろう。今後、さらに多方面から資料を収集し、多角的な視点から検証する必要があると考える。

第2に、大平学校後の中国における日本語教育・日本学に関わる研究及び日中教育文化交流のあり方である。

これまで本論で述べてきたように、大平学校の全体像は、かなり明らかにされているとあってよいが、しかしいまだに不明な点も多い。とりわけ第5章では大平学校の継承として、北京日本学研究中心（北京外国語大学）について言及したものの、教師教育から日本語教育への変化の言及に留まっている。

大平学校から北京日本学研究中心、そして北京大学現代日本研究センターへの進化と発展から日本の中国における人材育成の変遷が分かる。すなわち、単なる語学教育から言語、文化、社会へと広がり、また教師研修から修士課程、さらに博士課程へと昇格していったのである。

しかしながら、北京大学現代日本研究センターについての詳細な検証は残された課題である。大平学校における日中協力の運営方式、あるいはプログラムは、ここでどのように継承され、発展を遂げたのか。そして日本語専攻ではない受講者は、なぜこのコースに参加し、彼らにとってどんな意義があったかを引き続き検証する必要がある。

大平学校の研究は日中教育文化交流の過去、現在、未来を結ぶテーマである。こうした北京大学現代日本研究センターの日本語教育実践の検討は、今後の日中教育文化交流のあり方へとつながると考える。

第3に、諸外国が自国以外で自国語及び自国文化の普及を図るために設置している教育文化機関の検証がある。著名な所としてはイギリスのブリティッシュ・カウンシル、ある

いは近年、諸外国に設置されるようになった中国の孔子学院などがある。

孔子学院は中国の急激な経済成長と海外貿易の拡大に伴う世界的な中国語ブームを背景としている。そして、世界各国の人々との相互理解を深め、中国語・中国文化の影響力を拡大するため、孔子学院を設立した。

このように中国はイギリス、フランス、ドイツ、スペイン、日本などの国の経験を参考し、自国の言語文化を広げる道を歩み始めた。ちなみに大平学校は日本政府が日本語普及事業の中で最も規模の大きい事業であり、大平学校の成功が国際交流基金の発展の土台となったが、中国は孔子学院の設立時に、国際交流基金のやり方も参考にしている。

孔子学院は、2012年までに108の国と地域に400校が設置されると同時に、500校以上の中小学校で孔子学堂が設置されている⁴⁴。しかし、量的な成長を達成した孔子学院への、世界からの評価は賛否両論である。

今後如何に質の面を重視し、個々人のエンパワメントにつながり、生涯学習としての言語教育を実現できるのか、真の「人的交流の場」、「友好を促進する場」、「文化交流の場」を構築していくか、大平学校の事例を参考にする部分も多いだろう。今後、大平学校から孔子学院、日本語教育から中国語教育へという視点を広げて、言語語学の教育の研究を進めていきたい。

現在、日本と中国では、大平学校に関心を寄せる研究者が増えつつある。今後、大平学校の実践を土台にしながら、両国の教育文化交流の振興のため、協力関係が結ばれることを期待したい。

⁴⁴ 中国国家漢弁ホームページ http://www.hanban.edu.cn/hb/node_7446.htm、2014年8月17日、最終閲覧。